

続々

いのちの伝言

— 私の戦争体験より —



## 桶川市平和都市宣言

恒久平和は、人類共通の念願である。

しかるに、大国間における核軍備の拡張はますます強まり、世界平和、人類の生存に深刻な脅威をもたらしている。

我々は、世界最初の核被爆国民として、今なお続く被爆者の苦しみを思うとき、この地球上に再び、ヒロシマ・ナガサキの惨禍を繰り返さないことを、全世界の人びとに訴える。

我々は、恒久平和を求める立場から、非核三原則を守り、すべての核保有国に対し、核兵器廃絶を求めるとともに、軍備の縮小を強く要求するものである。

ここに桶川市は、平和への誓いを新たにし、厳粛に平和都市を宣言する。

昭和 60 年 1 月 1 日

桶 川 市



▲桶川駅構内 見る観るコーナーでのパネル展示

# 平和を考える

## 10日間

市では、過去の戦争を振り返り、平和への願いを次の世代に伝えていくことを目的に、昭和57年から、毎年8月6日～15日の期間を「平和を考える10日間」として、平和をテーマにした、さまざまな事業を行っています。



▲ピースキャラバン(桶川西中学校)



▲市民から寄せられた千羽鶴は、広島市と長崎市に寄贈しています。



▲桶川駅自由通路での横断幕の掲示



▲毎年多くの折り鶴が寄せられます。



## 平和図書コーナー

桶川市立図書館所蔵の戦争や平和関連の図書をあつめたコーナーを設置した。(桶川市立図書館)

## ピースブロック

パネル展示来訪者に木のブロックに平和へのメッセージを書き入れてもらい、「ピースブロック」を作成した。(市民ホール・平成19年度)



## 平和のキャンペーン

桶川駅東口・西口周辺で、「恒久平和」をアピールするため街頭キャンペーンを実施した。





## 平和のメッセンジャー

市内中学生を「平和のメッセンジャー」として広島平和記念式典に派遣し、市民から寄せられた折り鶴を原爆の子の像にささげた。(写真は平成19年度の派遣者)

## 時代の証言 平和講演会

知覧特攻平和会館初代館長、板津忠正さんによる講演「特攻の真実と平和」(平成22年度)



## 親子平和資料館 バス見学会

埼玉県平和資料館、桶川市歴史民俗資料館、旧熊谷陸軍飛行学校桶川分教場を親子で見学した。(平成26年度)



## 広島市訪問

平和首長会議加盟自治体である桶川市の市長小野 克典が、広島平和記念式典に参列した。(平成26年度)

## 長崎市及び知覧 特攻平和会館訪問

旧熊谷陸軍飛行学校桶川分教場跡地とのゆかりが深い、鹿児島県南九州市の知覧特攻平和会館を視察した。(平成27年度)



## 平和の標語

市民と市内中学生から「平和の標語」を募集し、寄せられた標語は市役所仮設庁舎に掲示した。(平成27年度)





## 平和へのメッセージ

10日間にわたり合唱、楽器演奏、朗読などで平和について考えるイベントを開催。

市民活動団体との協働により実現した。(平成28年度)

## 平和の木

「平和へのメッセージ」会場来訪者から寄せられた、平和へのメッセージを一葉一葉に大きく育った「平和の木」(平成28年度)



## 市職員の広島訪問

市職員が広島平和記念式典に参列。

広島市内で実施される様々な平和事業を視察した。(平成28年度)

「続々 いのちの伝言― 私の戦争体験より ―」 発刊によせて



桶川市長 小野 克典

戦後70年を過ぎ、戦時中の出来事を実体験として拝聴する機会は、ずいぶんと少なくなってきたように感じます。

市では、昭和62年度から「戦争体験記」の募集を始め、毎年、広報8月号に掲載しており、この度、三冊目となる「続々いのちの伝言―私の戦争体験より―」（平成19〜28年度の作品を掲載）を発刊することができました。体験記をお寄せくださった皆様に、心より感謝申し上げます。

戦争によって家族や友人を亡くし、悲しみを抱えながら懸命に生きてこら

れた方、集団疎開で両親と離れ離れになり、さびしさと空腹に耐えながら幼少期を過ごされた方、戦地で同僚と死に別れ、自らも九死に一生を得る体験をされた方――。

どの作品からも、「戦争を二度と繰り返してはならない。この現実を伝えなければ。」という使命感のような強い思いが、痛いほど伝わってまいります。いまだ、世界各地で戦争は繰り返され、私たち人類最大の課題は続いています。

しかし、私たちが自身や家族や友人を大切にして、隣人の価値観を理解しようと努力すること、そして、平和な日常に感謝する心を持ち続けることが、「恒久平和」へとつながるものと信じてやみません。

この冊子が、戦争を知らない後世へと語り継がれ、平和な社会が永遠に続く礎となることを心から願い、発刊によせてのご挨拶とさせていただきます。

平成29年3月

## 目次

※年度内の掲載順は順不同です。

### 平成19年度（2007）

私の昭和20年（1945年）

私の戦争体験記

伊藤 近義……………1

鈴木 卓郎……………5

### 平成20年度（2008）

軍隊生活体験 思い出の記

中国満州奮闘記

防空壕の句会

一兵士の手記

小勝 清三郎……………8

桜沢 正一……………11

尾高 達彦……………13

島村 繁……………16

## 平成21年度(2009)

昭和七七年四月八日

アメリカB25帝都初空襲

清水 幸司…… 20

## 平成22年度(2010)

旋盤工

秋山 茂…… 24

私の戦争体験

藤田 保江…… 27

中国大陸従軍記

弓座 澄夫…… 29

戦争体験記

小川 富久…… 31

戦争体験(回想)記

大川 七平…… 34

忘れられない引揚げの思い出

堀井 美和子…… 36



平成23年度（2011）

少年が覗いた戦争

山野 明…… 39

平成24年度（2012）

私の戦争履歴書

岩田 博…… 42

戦争遺児の思い

岩田 とし…… 44

母娘の戦争

近藤 文子…… 45

私の徴兵体験

和久津 文勇…… 47

平成25年度（2013）

私の戦争体験記

小野澤 悟…… 50

鮮烈な映像・甲府空襲

小宮山 勝…… 52

私の見聞した戦争体験  
無理無体な銃後の守り

砂川 忠夫……54  
福田 太郎……56

## 平成26年度（2014）

還ってこなかった祖父  
最後の回天特攻隊  
東京大空襲の直後を辿った記憶

三橋 一輝……59  
辻本 政晴……63  
高橋 眞次……66

## 平成27年度（2015）

今も耳に残る玉音放送  
忘れられない4月15日

小川 富久……69  
中村 みさ……72

平成28年度（2016）

甲府の街 空襲

戦争体験記

終戦の日

東京大空襲と私

内藤 武……………75

小林 まちこ……………77

小川 康一……………80

遠藤 敏勝……………83

# 続々 いのちの伝言

— 私の戦争体験より —

## 平成19年度

### 私の昭和20年（1945年）

伊藤 近義

（若宮）

私は、菖蒲尋常高等小学校に入学したのが昭和12年（1937年）の春で、すぐに日中戦争が始まり、昭和16年12月、5年生の時に太平洋戦争が起きました。在学中は戦争が続き国民学校高等科2年を卒業したあとに長い戦争が終わりました――。

昭和19年（1944年）、私が高等科（現在の中学2年）になりますと、戦況は厳しくなりサイパン島が玉砕し、米軍が本土に近づいて来ました。私たちの学校も東京から集団疎開と縁故を頼って来た子供たちで一杯となりました。この頃にはどこの家もお年寄りと女の人と子供たちばかりで農作業をする人

も少なく、毎日手伝いに出掛けました。私は父が病気で仕事が出来ず、農家の手伝いを言われていました。そこで少年農兵隊で1年間の訓練をすれば農業が出来る事がわかり、私は父と話し合い、入隊を決めたのが昭和20年1月の末でした。

私が仲間の7人と高等科2年の卒業を待たずに飛び込んだ世界は厳しいものでした。私たちは入隊翌日、岩槻から東武電車に乗せられて熊谷市石原の埼玉兵舎に連れて行かれました。そこは荒川の広い河川敷に兵隊屋敷が建ち並んだ、埼玉県の全体の訓練場でした。私たちの南埼玉郡は第8中隊で、翌日の起床ラッパからスタートしました。地下足袋を毎日替えても足下から水が入り凍えそうでした。午前中は勉強ちよくゆとして軍人勅諭を習い、午後は行軍で5キロ10キロも歩きました。

こうして寒くて辛い熊谷の訓練も終わり岩槻に来たのが、3月の9日で暖かさを感じました。この日は忘れもしない東京の下町一帯が焼野原になる大空襲があり、南の方が真赤に燃え上がり、もの凄いい音が一晩中続きました。



この時に2人の叔母さんの家も焼かれました。

岩槻の私たちの仕事は、各地の農道の整備や用排水路整理と農家の応援と毎日働く事になりました。今の自衛隊ではないが、河川の改修や暗渠排水工事に泊まり込みでした。そうして4月になり、慈恩寺の観音様に入り訓練が始まりました。朝は3時に起こされて岩槻駅までの8キロ駆け足、それから回廊の掃除と座禅に法話が済んでから朝食となり、8時には各班に分かれて唐鍬やスコップを担ぎ仕事場に向かいました。私たちは食量増産のために荒れ地の開墾や岩槻の無線の下地を掘り起こして、さつま苗を植えました。

昭和20年8月14日はお盆の暑い1日でした。朝からラジオで「明日15日正午に重大放送があります」が繰り返し流されていました。その夜遅く空襲警報が出たときは、西の空が真赤に燃え上がり爆発の音とともにB29が東に飛び去る最後の姿を見ました。またパラパラと残りの爆弾を落としていきました。そうしてB29が東の彼方に消える頃はかなり夜が更けていたと思います。熊谷の方は激しく燃えるようになりましたが、その数時間後の15日の正

午に玉音放送で終戦となり、悲しき出来事でした。それから日本の本土を焼き尽くしたB 29を見ることはなくなりました。

その後私たちの農兵隊も解散になり、農事講習所に衣替えしました。こうして昭和20年が過ぎ、私たちは昭和21年1月31日に修了して1年振りに我が家に帰り、暖かい布団に寝ることが出来ました。

・唐鋏<sup>とうぐわ</sup>：頭部を全部鉄で造り、木の柄をはめた鋏。もっぱら打鋏として開墾・根切りなどに使用した。

## 私の戦争体験記

鈴木卓郎

(若宮)

昭和16年12月8日、太平洋戦争開戦当時多くの少年たちは、軍国主義教育に洗脳され、軍人になることにあこがれていました。軍人になってお国に尽くそうという純粋な心と軍人のかっこよさに魅せられていたからです。

私は当時、東京の新宿近郊に住んでいましたが、食糧事情は大都会から厳しくなってきました。遂にドロップの一個も食べられないようになってしまいました。民衆より兵隊さんに食糧を回さなければ戦えなくなってしまうからです。配給では足りず、皆、農家へ買出しに行きました。農家の人も米を隠したりすると強権発動で厳しく罰せられました。

戦争も激しくなり、戦死者も増え、兵隊さんを補充しなければならぬの

で、国は家族の事情など一切考慮せず、一家の大黒柱を召集していききました。私の妻の家は当時、小学生を頭に赤ちゃんまで6人の子どもがいましたが、父親が召集されていきました。母親はどうやって育てていったらよいのでしょうか。その後、大空襲にも遭遇しましたが奇跡的に無事でした。そして父親も帰ることができました。

日本も次第に弱体化し、B 29の空襲も頻繁になってきました。私は当時、中野駅近郊の中学に通っていましたが、朝一時限目が始まろうとした時、警戒報のサイレンが鳴り、先生はすぐ授業を中止し家に帰るよう言われ、家路に向かいました。中野駅を離れて10分ぐらいで空襲警戒報のサイレンが鳴り、まもなくB 29の大編隊が見えてきました。紺碧こんぺきの空に輝く銀翼と長く尾を引いたような4本の飛行機雲、その光景に思わず何もかも忘れて見とれてしまいました。少し遅れて日本の戦闘機が攻撃にきました。編隊に近づく寸前で真っ赤な火の玉となって落下していきました。

それからまもなく強制疎開となり、両親の郷里福島県で農作業を手伝いま

した。村の若い人たちは皆、兵隊に行ってしまう、どこの家も困っていました。私は思わぬことで体を鍛えることが出来たと思っています。この戦争に遭遇した人は皆、何かしら心に傷を負っています。しかし戦後たくましく生き抜いてこれたと思います。

終わりに大空に火の玉となって散っていった兵隊さんに黙とうを捧げます。

平成20年度

## 軍隊生活体験 思い出の記

小 勝 清 三 郎

(寿)

「文明開化のある中で 軍隊生活知らないか 知らなきゃ私が説明する」

「花の二十一、徴兵で 見事、甲種合格す。」

(チャカボコ チャカボコ、と木魚を叩いて歌っていた)

昭和19年7月出征。東部6部隊(麻布三連隊)に仮入隊。(一週間後)朝鮮の京城第22部隊第二中隊内田隊に入隊する。

一日の教練や勤務が終わって、疲れた体で銃器の手入れや軍靴の手入れ、また洗濯物等済ませて整理して、やれやれ自分の時間にて故郷に手紙でも書こうと思う束の間、いやな点呼の時間がやってくるのだった。

内務班の前の廊下の両側に並び、服装の検査から始まるのだった。一通り服装の検査が終わり、ホッとする間に、今度は一品検査が待っているのだった。何をやるかわからないのだ。銃、短剣、軍靴、飯盒等はんごうで持ち物の中の一品を検査するのだった。特に銃は検査が厳しかった。銃には菊の御紋の印があり、天皇陛下より授かりもので、大事に扱うように言われていた。

或る時、演習に行くときに営門の前に整列した時に、一人銃を倒した者がいた。運悪く班長に見つかってしまった。夜の点呼後に呼び出されて、班長に殴られてしまった。皆が見えていて、どうすることも出来ない、下手に口出しをすると、全体責任といつて皆にとばちりが来て、殴られてしまうのだ。

検査も無事終わり、消灯までのひと時、やっと自分の時間と思う間に、今度は古参兵たちが「俺の出番がやってきた」とばかりに集まってきて、消灯までの間に初年兵たちのいじめが始まるのだった。何のかんと言ってはいじめるのだった。

これも軍隊生活の中では避けて通れないものなのか。見ているほうでは面

白いが、やっている本人にしてみれば一生懸命なのだ。いろいろと芸はあるが、古参兵たちはサーカス等の真似をして、呼び込み役を面白おかしく又賑やかに囃し立てるのだった。「サアー、サアー、イラッシャイ、イラッシャイ、お代は見てからのお楽しみ」と言つて、大声を出して、やり始めたりするのだった。最初に「鶯の谷渡り」からで、次が「蟬の鳴き声」等で一通りやり終る頃になると、やがて消灯ラッパの音が響いてくるのだった。

「初年兵は、また寝て、泣くのかなー」と聞こえてくるのだった。

その後、一期の検閲も無事に終わり、仁川の飛行場に作戦命令により転属となり、(戦場と同じ扱いとなる) 約4か月間、露営(野営) 生活をする。

こんな軍隊生活ではあったが、私は無事に帰ることができたのは幸運だった。戦地で亡くなられた、将兵の方々のご冥福をお祈り申し上げます。

合掌



## 中国満州奮闘記

桜 沢 正 一

(西)

昭和13年、旧東兎玉村のあちこちに満蒙開拓青少年義勇軍募集のポスターが貼つてあり、それを見た満州のことを何も知らない農村の人たちはよい話だと思い、我が家でも兄の清が満蒙開拓青少年義勇軍として渡満することになった。清15歳の頃のことだった。

そして茨城県内原訓練所で1か月の訓練の後、清は満州吉林省へ派遣された。

現地に着くと約10町歩の広漠たる荒地に小さな小屋が3軒建っているだけの光景に清含む開拓青少年義勇軍の面々はがっかりした。指導員が来て3日分の食料と布団、農機具を置いていった。清たちは仕方なく農作業を始め

たが秋田から来た15歳の少年が日本に帰りたいと泣き出したので皆も寂しくなったという。3日目に指導員が再び現れ農作業のやり方を習った。そして清たちは開拓団として夏は荒地を開墾して畑を作り、満州の厳しい冬に耐える生活を3年間送った。その間食事は稗ひえや大豆ばかりで、布団も8人で1枚の布団を使っていたので辛かったという。

毎年3月は種まきの季節で大豆、かぼちや、メロンやとうもろこしなどいろいろ蒔いた。清たちの努力が実りようやく3年目には出荷できる農作物が出来たのでトラックで出荷し生活が軌道に乗り始めた。

そんな生活も長くは続かず清も20歳になったときに軍隊に入隊し、自動車隊として物資運搬の任務に当たった。大きな戦闘に巻き込まれることも無く8か月がたち、今度は満鉄（南満州鉄道）に入社し、大連の機関車研究室に配置された。本人から私の元へ「青天の霹靂へきれきだ」と手紙が来た。それから月に1回は清から手紙が来た。満州へ行って6年目、清も出世したものだとも私も誇らしかった。しかし昭和20年8月15日の終戦を迎え、満州国も満鉄も

無くなり、満州で結婚し家族を持ちたいという清の夢も消えた。清の満州での6年間は終わった。

そして清は昭和21年2月に帰国した。

（清は平成14年に77歳で他界しましたが、本人に代わって応募いたしました。）

## 防空壕の句会

尾 高 達 彦

（神明）

俳句仲間のS君から三斗会の句集が送られてきた。冷汗三斗の覚悟で始まった句会は今年で10年になる。

思えば、私たちが俳句と出会ったのは、もう63年も前の7月の梅雨の晴れ間の昼下がりだった。ラジオから流れた「東部軍管区情報、敵数機、京浜西

北方に向かいつつあり。埼玉地区警戒警報発令」の放送に、私たちは国語の教科書を抱えて校庭に掘られた防空壕に駆け込んだ。国語の教科書には次の芭蕉の句が載っていた。

「梅が香に のつと日の出る 山路かな」

その頃、私たちの担任は軍国主義一辺倒の T 先生から、もんぺ姿も可愛らしい B 先生に替わったばかり、お姉さん先生に替わったことでクラスの雰囲気も和らいで、ひょうきん者の M 君の「のつとなんて、俺みたいな顔をして太陽が出たのかね」というこの間までなら大目玉を食らいそうな発言に、クラス中がどっと盛り上がったりして・・・「さあ、みんなで俳句を作ってみよう」と先生の声に、クラス一の軍国少年の S 君が「大空に 入道雲は 大威張り」と応じた。

左足が不自由で、一人ぼっんとしている F 君が詠んだ。

「掃除する 後に散りけり 梅の花」と。疎開前に住んでいた東京の F 君の家はお寺だった。毎朝庭を掃くそばから花卉が落ちる。そのことを詠んだと

言う。

8月14日の終戦前夜。照明弾に照らし出された街は一夜にして灰燼に帰した。新聞もラジオもない街に「日本は負けたらしい」という情報は流れてきたのは15日も暮れてからだった。それを追いかけるようにF君が逃げ遅れて亡くなったことが知らされた。

二学期早々、先生の指示で教科書の軍国主義に関連する記述が墨汁で塗りつぶされていく。「先生、ここも消すんですか？」とS君、手元にはあの芭蕉のページが開かれていた。ページは無事めくられた。消されなかった芭蕉のページとあの日の句会(?)が三斗会の原点だとS君はいう。

## 一兵士の手記

島 村 繁

(川田谷)

私は現役兵として昭和18年2月8日、広島集合のため、桶川駅より歓呼の声に送られ東京駅に。東海道線に乗り換えて一路西へ。広島にて下車駅近くの国民学校（当時は小学校といわず国民学校と言っていた）に着き、校庭の運動場にて軍服に着替え、小銃帯剣を支給されました。その後、広島港より乗船して朝鮮の釜山に上陸、列車に乗りゆく先は満州です。

初年兵は、あつちの部隊に行き、こつちの部隊に行きチリジリバラバラ。

べいあん

私たちは10名程、衛生兵修業のため、北安の陸軍病院に行き4か月過ぎた頃、「大川大隊はサイパン守備に行き全員玉碎した」という話を聞き、俺たちは編成外で良かったなと喜びあったものです。修業も終わり、今度は黒河の第

六国境守備隊に転属となりました。対岸の灯火はロシアの都市ブラゴエチエ  
ンクスです。昭和20年4月の転属で朝鮮の済州島の守備に移り毎日塹壕掘を  
しました。(衛生兵は掘らない)飯はコウリヤン飯、おかずは無し。おみおつ  
けは乾燥粉味噌を海水に入れ、サツマ芋の葉を入れた汁たるや食品の形容詞  
にうまいまずいという言葉があるが、そんなものではありません。まず天下  
一品生涯忘れ得ない味でした。

8月15日全員11時半、裏山に集合を命ぜられたので、なんだろうなあと思  
い、行きますと「12時より天皇陛下の放送があるからよく聞くように」と中  
隊長が言ったので聞いたが、雑音が多く、なにを言っているのか分かりませ  
んでした。終わって隊長が「残念であるが大東亜戦争はならず、遂に無条件  
降伏となった。諸君は武装解除をして日本に帰り平和産業に就き、祖国の復  
興に従事することになる。充分健康に留意して全員故国の土を踏めるように、  
また帰国船が来るまでは、現地の各家庭に分散し泊めていただくことにな  
る。」とのことでした。

船を待つこと60日余日、朝早く「オーイ船が来たぞ」の声に飛び起きて沖を見ると大きな船が十隻ばかり港の方に向かっておりました。

佐世保港に着くと全員素裸にされ、紐と名札を渡され、名前を書いて被服をくくるよう指示。アメリカ兵に頭から白い粉をシュウシュウと吹き付けられました。今考えるとDDTで虱の駆除で、被服は高压熱風消毒をしていたのでしよう。貨車に乗り込み、途中「広島、広島」と言う駅員の声に、アツ原爆を落とされた広島だ。まして私は駅近くの国民学校で軍装一式を受け取った思い出の所なので、どうなつて居るだろうなあと外を見て思わず、アツと驚きました。駅から広島湾の海が見えるではありませんか。広島市街といえば一面の焼け野原、所々に鉄筋コンクリートの建物があり、印象的だったのは神社の鳥居だけが倒れずいくつも残っていることでした。たった一発の原爆でこの様な壊滅的な被害に思わず慄然りっぜんとしました。そして夜が明けて静岡あたりに来たのでふと北を見ると悠然と富士山が横たわっているではありませんか。



眼前には旭光きょくこうに燦然さんぜんと輝きそびえ立つ富士、目を転ずれば祖国は戦火によつて見るも無残な焼野原、それを万感の思いを持って眺める無蓋貨車むがいにたたくむ無言の復員の兵、あまりにも対照的な眺めに思わず長く嘆息、戦争はいかん、絶対にやるべきでないと思いました。

・塹壕掘ざんこうほり…野戦で敵の攻撃から身を隠す防御施設。溝を掘りその土を前に積み上げたもの。

・無蓋貨車むがい…石炭や木材など運ぶ屋根のない貨車

平成21年度

昭和七七年四月八日 アメリカB25帝都初空襲

清水 幸司

(北)

当日宮城きやうじょうの御守衛勤務は、東部第七部隊（近衛歩兵第四連隊）上番の日でした。

私は正門歩哨ほしやう（二重橋、二人哨）銃前哨と、夜間は鉄橋歩哨、東車寄歩哨を引率交替する歩哨係の上等兵でした。

午前中は変わりも無く、大膳寮より運んだ昼食も済み、控室では「歩哨守則」ほしやうしゆそくを勉強する若い兵、話が盛り上がる古参兵など、いつもと変らぬ昼下がりを過ごしておりました。

その時、電気掲示板に「正門」の二文字の点滅とブザーが鳴り響きました。

と同時に私は正門に走り、正門の小扉の門を外すのもどかしく、哨舎前に出ると歩哨の指差す丸の内ビル郡後方上空に、多数の黒い弾幕が目飛び込んできました。飛んで帰り、報告と同時に山崎軍曹（内務班長）に命ぜられ「清水！賢所へすぐ行け、急げ！」と控兵四名を付けてくれました。付剣、駆け足で賢所前庭に入り、兵を四方に配して樹陰を特に警戒して居ると、向って左端の扉が開いており、その下に「キザハシ（階段のこと）」があり、その下の段に靴カバーが二足揃えられておりました。その時、掌典の方が見え、靴カバーを履いて昇殿の指示を受け、指示どおりに昇殿致しました。殿内は広く、そして暗く、何も見えませんでした。が、数メートル前方に御羽車が見え、先程の掌典の方が守るように立って居りました。指示は御羽車をキザハシ近くまで御移動することでした。前後で肩を入れて御運びして相当な重量だった事を体感しました。御用を済ませて降殿しました。非常の時とはいえども私共一兵士が昇殿を許されるはずもなく、その荣誉と緊張の連続で身に震えを覚えました。その時、遷座せんざの警護である事を知りました。

前庭では木陰に御羽車を中程に掌典、内掌典の方が列をつくり、樹陰を縫う如く望岳台に向かいました。程無く植林された小高い丘に到着。防空壕です。そして壕の分厚い扉が開かれていました。御警護も終わり、暫く周囲の警戒を続けた後、正門衛兵所に復帰いたしました。

翌日、下番、青山の部隊に帰りました。「中隊事務室に朝から多数の憲兵が出入り多し」と初年兵から告げられました。そして出た箝口令。「遷座のこと、親兄弟といえども話してはならん！」と、きついお達しでした。

あの時から六十数年経ちましたが、今でもはつきりと脳裏に焼き付いています。その事実を初めて書かせていただきました。

- ・宮城…天皇の平常の居所。現在は皇居と称する。
- ・歩哨…兵営・陣地の要所に立って警戒・監視の任にあたる兵。
- ・賢所…皇居で天照大神の御霊代とする神鏡を祀つてある所。内侍所ともよばれた。

・しょうてん掌典（男子）、ないしょうてん内掌典（女子）…天皇・皇后両陛下及び皇太子殿下御夫妻に奉仕する職。

・おはぐるま御羽車…賢所のお移り、遷宮などの際に用いる輿。

・せんざ遷座…天皇または神仏の御座を他に移すこと。

平成22年度

せんばんこう

旋盤工

秋山 茂

(南)

おけがわじんじょうこうとうしょうがつこう

桶川尋常高等小学校を昭和十五年に卒業した者です。当時はちやうど皇紀二千六百年で、“紀元は二千六百年” “ああ一億の胸は鳴る” とみんなで合唱しました。中学に入った途端に真珠湾攻撃が起こり、落ち着かず身が入らなかったのを覚えています。それから一、二年位授業はあったと思いますが、敵国語である英語の授業が中止となり、代わりに軍事教練が活発になりました。そのうち学徒動員令が発令され、私も動員される身となりました。まず学校近隣の農家の手伝いをした後、大宮日進の陸軍造兵廠にて勤労奉仕専従員となることが決まり、戦闘帽に巻脚絆、防空頭巾を肩に掛け早朝大宮駅西

口に集合し、二列縦隊で造兵廠第二工場へ通いました。

工場にはフライスという大きな機械が並び、工員の指導を受けながらいやおうなしに旋盤の前に立たされたものです。私は細長い鉄棒をバイトで削ってネジを作る作業に従事していました。そんな合間にも防空壕の中で仲良くなった工員さんに煙草を教えてもらったり、向かいのフライスで作業をしていた川口女学校の生徒さんに胸をときめかせたりしていたものです。夜勤にもかりだされ、昼夜問わず働きました。そんな生活の中でも工場で出る食事は数少ない楽しみの一つでした。さすがは陸軍、街では見かけぬ銀シャリのライスカレー、週に一度のおやつにはバターボールと栗まんじゅうが出て、時々持ち帰ってはお袋に進呈したのも覚えています。

そして昭和二十年八月十五日、工場についたと思ったら当事責任者だった小尉官クラスの将校から「今日は午前中に帰れ！」とのご沙汰があり、帰宅したところ、ラジオで終戦の詔勅と玉音放送を聴くこととなりました。内容は詳しくはわからなかったけれども、日本が負けたことは理解しました。兵

役は免れたが、「これから先はどうなるのか？」という不安に襲われつつ若き旋盤工は学業に戻るしかなかったのです。

おけがわじんじょうこうとうしょうがっこう

・桶川尋常高等小学校：桶川小学校の前身となる初等教育機関。現在のことぶき広

場（南小跡地）にあった。

りくへいけんぞうじんしやう

・陸軍造兵廠：大日本帝国陸軍の機関で、陸軍が使用する兵器や機材を製造した。

まききやはん

・巻脚絆：脛に巻く布。ズボンの裾が乱れないようにするため、足の鬱血を防ぐために使用した。

・フライス：鉄鋼などの物質に回転を与えて切削加工を行う機械。旋盤。

・バイト：旋盤を使用する際に刃を当てて対象物を切削する金属片。

へいふちやうし

・詔勅：日本国憲法施行以前において、天皇が公務で行った意思表示。



## 私の戦争体験

藤田保江

(神明)

我が母校を空襲から守るために、当時私の在籍していた高等女学校では夜警班を編成していました。先生一名に生徒が五、六名で班を作り、交代で学校に泊り込みをしていました。みんなで話し合い家にあつた食料を持ち込み、夕食と朝食を自炊していました。ゆでたジャガイモをつぶして、少しつなぎを入れてお餅にした汁物が美味しかったのは今でもよく覚えています。朝食をとつたらまた学徒動員先の軍需工場へ出向いて一日働きました。今では考えられない思い出の一つです。

昭和二十年三月十日夜、いわゆる東京大空襲で東京の空は赤く瞬き、焼夷弾で町は火の海になりました。私は当時板橋に住んでいたのですが、家の近く

しょういだん

があちこちで火事になり、家から100メートル位離れた竹やぶが燃え始めたときにはびっくりしました。父は大声で「早く逃げろ」と私たち家族に叫びました。私は父を残して防空頭巾をかぶり、リュックサックと救急袋をしよつて母と兄弟三人、計五人で逃げ回りました。夜が明けましたので家に帰ると幸いなことに家は焼けずに残っておりまして。ほっとしました。本当に恐ろしい一夜でした。

戦争の無い今の日本、平和な日々が続くこの幸せをこれからも願っております。また、戦災で犠牲になられた方々に対して、心よりご冥福をお祈りします。

## 中国大陸従軍記

弓 座 澄 夫

(下日出谷)

昭和十九年十二月、私は出身地の旭川師団に入隊しました。一週間ほどして軍用列車に乗り正月の二日に中国河南省の開封で降ろされて、徒歩で黄河を渡り、中国大陸特有の黄塵こうじんと闘いながら豆だらけの地下足袋の足を引きずりつつ、一月の二十日近くに河南省南部にあった原隊げんたいにたどり着きました。私は物資の輸送を行う輜重隊しちように配属され、翌日から初年兵教育をうけることとなりました。聞きしにまさる厳しい戦闘訓練と馬の調教、車両への荷物の積み方などに追い回され、何かにつけては上官から容赦なく殴られる日々の中で、寝るときだけが唯一自由な時間でした。

訓練も終わり、三月上旬に作戦に出発しました。軍隊では戦争のことを作

戦というのです。小さな頼りない分捕り品の馬で、車両には馬糧の大麦を積み、敵の飛行機に襲われぬように夜行軍を続けました。おりからの雨季で毎日のように雨が降り続き、暗闇の中、道なき道を泥まみれになって車の後を押しながら人馬一体となつて進みました。夜明け前に宿営地に着いたら、まず、馬のえさや水を探して与え、それが終わってから私たちの食事となります。私たちの食事といえ、辺りにいた豚や鶏を捕らえて食べていました。

それから泥のように眠り、日が暮れたら残り物を食べて出発する日々が何日続いたのでしょうか。雨も止み固い道となり、気づいたら私たちの隊は高い丘の上になりました。見渡すと大きな町が火の海になっており、ひっきりなしに飛び交う砲弾で炎が舞い上がっていました。やがて砲声が止み、日本軍が勝利したのがわかりました。

翌日には車の荷を降ろして三人一組になり陥落した町へ食糧や馬糧ちようはつの徴発へ行きました。まだ昨日の戦闘による火がくすぶっており、建物は破壊され、ベッドに横たわったままの死体やひざまずいたままの死体を見かけ、これが

戦争か、と思いました。駐屯後、わけもわからず衛生兵として中国で働きました。終戦後は中国人の治療にも当たる事もあり、戦争の悲惨さとどん底生活进行思い知らされました。

しちよう

・輜重…食料や武器などの戦闘継続に必要な物資。

ちようはつ

・徴発…人が所有する物を強制的に取り立てる行為。

## 戦争体験記

小川 富久

(若宮)

グウアーンという爆音と共に逃げ惑う人たち、その上空にP51爆撃機が低空飛行し迫ると同時にバリ、ビシ、ビシ、という音と共に機銃掃射してきました。人々は右往左往と逃げ惑う中、子どもである私は道をまっすぐ逃げて

いました。走りながら斜め上を見上げたとき、飛行士の眼鏡がキラリと光ったのが見えました。

次の瞬間、何が起こったのかわかりませんでした。私の目の前が真っ暗になり横転し、ゴロゴロと誰かと一緒に転がり道端の溝の中に落ちたのです。その直後道路にブスブスと不気味な音を立て機銃が突き刺さりました。後刻わかったことですが、布団屋のご主人が真直ぐ逃げている子どもを見て、古布団をかぶせると共に私と一緒に道の淵に転がり落ちてくださったとのこと。私の命の恩人です。

後日、父と共にお礼にお伺いし正座してお礼を言った、そのときのご主人の一言「良かったね」とその笑顔がいまだに忘れられません。

この出来事は私が十才のときだったと思います。時と場所は昭和二十年、群馬県高崎市石原町、私が高崎市片岡国民学校在学中のことです。高崎には本土決戦に備える東部三十八部隊があったため爆撃の対象となったとのこと。

この頃は登校途中に警戒警報がなったり、空襲警報がなったり、授業もまならず普段でも農家に桑の幹の皮剥きの奉仕等、意味もわからず命じられるままにやっていました。農家のおばさんから昼食に出していただいたさつまいもが美味しく「ご苦労さん」の一言も温かく感じました。また、自宅の近くに焼夷弾しょういだんが多数落ち、家族ともども防空壕に避難しドン、ズンと音と共に辺りが真っ赤に染まりました。そのとき見ず知らずのおばあちゃんが飛び込んできて「助けて」と訴えてきました。私が奥へどうぞというところ「ありがとう」と座り込みました。

その後家族で安中市に疎開し私は無事生き延びました。前述の布団屋さんの「良かったね」、農家のおばさんの「ご苦労さん」、おばあちゃんの「ありがとう」の三つの言葉が今でも耳に残っています。

## 戦争体験（回想）記

大川 七 平

（坂田東）

私は昭和十二年に大阪市淀川区中津という淀川のほとりで生まれ、今年で七十三歳になります。終戦は国民学校二年生の夏、八歳で迎えました。当時は春には淀川堤に兄や姉たちと土筆つくしを摘みに行く等、楽しいこともありましたが、戦時中は太平洋戦争も終盤に近づく毎日のように米国の戦闘爆撃機が襲い掛かってきて一面に空が暗くなり轟々たる爆音や、あちらこちらでドカーン、ドカーンと爆弾の破裂音が聞こえ、防空頭巾を目深にかぶり、耳を押さえてしゃがんだり、近くにガードがあれば逃げ込んで震えていたことを思い出します。その頃は今の私と同一年くらいの七十四歳の祖父に導かれて行動していましたが、学校へは上級生に連れられて並んで通っていました。



授業中に空襲警報が発令されれば直ちに勉強をやめて、給食のねじり黒パンをいただき、兄や姉たちに連れられて帰宅することがたびたびのことでありました。私の住まいは大阪市の北のはずれにあり、空襲時は我が家の縁の下に掘られた防空壕に避難していましたが、終戦が近い頃には家の防空壕では危ないので近くにあるガード下に逃げ込んで空を見上げていました。爆撃機からの爆弾や焼夷弾しょういだんが舞い落ち、着地し一斉に爆発し多くの家が燃え上がるすさまじい景色を眺めても怖さは最早もはや感ぜず、逆にきれいだなあと思ったりもしました。

昭和二十年八月十四日の昼ごろの集中爆撃にて住んでいた家を失い、私は体一つで生き残りました。さすがに自分の家が焼け落ちて崩れていくときは小さな目から涙がこぼれ落ちたのを覚えています。そのころは年老いた人ただけが大人として残されていて火が出て消火などなすすべも無く、避難の指示をしてくれるのがやつの状況でした。

昭和二十年八月十五日正午に、昭和天皇の玉音放送が流され「朕深く世界

の・・・」と、日本の降伏を受け入れる旨のお言葉に涙を流したのも早や六十五年前の前の話になってしまいました。その後、焼け出された所を去り、親戚を頼り、大阪市の南にうつり借家住まいで貧乏をしながらも小、中、高校を卒業し、就職の後、転勤命令で東京に出て、この埼玉に住み着き四十五年を経過しました。

## 忘れられない引揚げの思い出

堀 井 美 和 子

(坂田東)

日本が太平洋戦争に敗れた後、私たち家族は当時住んでいた朝鮮半島から引揚げるべく、仁川港いんちよんから近所の方々と小船で日本を目指し出港しました。しかし途中で座礁してしまい、白い布をつないで船から振りつづけ、運よく

アメリカ軍の上陸用舟艇じょうりくようせんていに救助されました。

### 座礁せるわれを助けし舟艇のアメリカ兵の手大きかり

仁川港にもどり、今度は陸路で釜山ぶさんに向かう途中、仁川の南にある朱安ちゅあんにて父が列車から引き降ろされてしまい、私たち家族は非常に心配になりました。とりあえず父の荷物を釜山の事務所に預け、先に引揚船で仙崎せんざきに上陸し、一夜を港の近くの家でお世話になった後、島根の浜田に住んでいた母方の叔母のお世話になることとし、お寺のそばの家を借りました。父は釜山にあった荷物を持って一月遅れで内地に帰ってきました。母は引き上げの際にあめ玉の中へ紙幣を入れて丸めた荷物を置き忘れてきてしまった、としきり残念がっていました。引揚者は持ち帰ることのできる財産の額が決まっております、母も隠して財産を持ち帰ろうとしていたのです。

母は友人たちと栗まんじゅうを作ってはお菓子屋さんに売り、父は玄関先で貸し本屋などをやって生計を立てておりました。七輪に松ぼっくりをくべて、その上に海水を入れた鍋を乗せては煮詰め、家族総出で塩を作ったりも

しました。

お菓子作りで無理をした母は、病に倒れ昭和二十三年五月に亡くなりました。母方の親戚を頼って引揚げておりましたので、父は故郷の群馬に近い関東へ帰りがたがるようになりました。そういったわけで私たちは東京の代々木に住んでいた父の姉を頼り転居しました。

当時を偲び世の中の変化に感慨深い想いです。戦時中は学校で馬の鞍作り、ボタン付け、畑作り、防空壕作り、工場での薬莢検査やつきょう、道立病院での薬包みと包帯巻きなどいろいろな動員に参加していました。勉強はあまりしていないなあ、と振り返り思います。

ささえあい厳しき戦後生き延びて同胞集う京の都にはちから

争いはしたくなきもの人々の心荒びて防ぎよもなし

・仙崎せんざき…山口県長門市の港。引揚港として使用された。

平成23年度

少年が覗いた戦争

山野明

(下日出谷)

昭和二十年八月九日、参戦してきたソ連軍が、満州の国境を超えて南下してきました。

日本人は殺されるという噂が流れており、このため八月十四日、母と当時十一歳だった私と六歳だった妹の三人はリュックサックを背負いハルビンか

ほうてん

ら奉天へ向かいました。十五日、車中で、日本は戦争に負けたというひそひそ話が聞こえてきました。母からは日本人と知られるから、大きな声を出さないように注意されました。

十六日、奉天に着きました。市内は軍用車や戦車が巡行し、ソ連軍、国府軍および八路軍の兵士が駐留していました。また銃やピストルの音がひっきりなしに聞こえ暴動、略奪、火災が頻発し、学校、銀行も閉鎖され店はシャッターを下ろしていました。

女性は拉致、暴行を避けるために丸坊主になって顔に炭を塗り、わざと破ったり汚したりした服を着ている人もいました。腕時計を略奪した兵士が四つも五つも腕につけていました。私たちは脱出時に持参したカメラ、時計、貴金属を売却したり、これらを食品と交換したりして生活しました。持参した現金はインフレのため、紙くず同然になってしまいました。

二十一年に入り待望の引き揚げが始まり、六月に貨物列車で出航地のコロ島へ向かいました。日の丸を掲げた船は大きく、頼もしく見えました。三人はたたみ二畳ほどのスペースを与えられました。食事はおにぎりとお味噌汁、漬物が差し入れられ、このおいしかったことはいまでも忘れられません。数日後、博多の緑色の島影が、きれいに覚えてきました。

郷里高松に着いたものの、空襲で実家が全焼しており、二日後、祖父母の下に身を寄せることになりました。夏も過ぎ秋口から、母は過労のため病床に伏し、翌年三十四歳で他界しました。

母は私たちにとって最大の戦争犠牲者です。

・ハルビン…中国東北地方の主要都市。黒竜江省人民政府の所在地。

・奉天…ほうてん現在の瀋陽。

・国府軍…中華民国軍の通称。

・八路军…中国共産党軍の通称。

・コロ（葫蘆）島…遼東湾にある島。ここから約百万人の満州からの引揚者が日本

に渡ったとされる。

平成24年度

## 私の戦争履歴書

岩 田 博

(川田谷)

昭和二十年一月当時、私は桶川で研磨工として働いておりました。ちょうどそのころ勤めていた会社が征空義勇工作隊という勤労組織に加入し、同僚十二名とともに東京府武蔵野町にあった中島飛行機武蔵野製作所に出張を命じられ、そこで勤労奉仕することになりました。この工場はゼロ戦をはじめ陸海空軍の戦闘機エンジンを生産する国内最大級の工場という事で、広い地下工場や近くには高射砲が配置されているなど、驚くことが多くありました。そんなある日工場が空襲に遭いました。地下道に避難したにも関わらず爆風で壁にたたきつけられ、全く生きた心地がせず、これは今でも忘れられない



い最大の恐怖体験となりました。この空襲で私たちは職場を失い、用賀の別の工場で勤めることになりました。

四月には、ついに私にも赤紙が届き、これで私も国に命を捧げる時が来た、と痛感しました。会社と部落の神社で壮行会を済ませ、千葉の戦車第三十六連隊に入隊しました。初めて部隊で食べた食事が赤飯でめでたいと思ったものの、後にコウリヤン飯とわかりこれはこれで美味しかったと覚えています。七月には兄弟が面会に訪れ、そら豆の塩餡入り小麦饅頭と炒り大豆を差し入れてもらい、厳しい軍隊生活の中味わたたそれらが非常に美味しく、往時を偲び今でも感謝しています。そして八月十五日に全員集合で天皇陛下の終戦のお言葉を聞いたときは、ただ感涙絶句するのみでした。

今振り返って見ると戦時中、食糧事情は厳しく、会社で出されたうどん、人参、大根などの簡単な雑炊でも喜んで頂いた事を覚えています。

今でも世界各地で紛争は耐えませんが、私は平和な日本で幸せに暮らせることに感謝し、二十一世紀は世界が平穏でありますよう願っています。

## 戦争遺児の思い

岩 田 と し

(川田谷)

私の父は昭和十七年一月十七日に召集を受け、横須賀海兵団に入隊しました。残された祖父母が農作業、しかも機械化されてない手作業で苦勞した事を思うと、頭が下がります。農繁期になると学徒動員で来た学生さんが住み込みで慣れない作業に精を出してくれました。しかし収獲した米麦はほとんど供出してしまい、食事にも事欠く有様でした。

学校では学童の強制疎開で東京から十二名の友人が入り教室は大分賑やかになりました。教科書は二名で一冊、ノートは無駄なく書きました。でも私達は「欲がりません、勝つまでは」を合言葉にし、子供ながら「貧しさ」「我慢の日」を続けていきました。

戦況が日に日に悪化する中、昭和十八年一月二日、ニューギニア島方面にて父が戦死したとの公報が来たのです。私はその時茫然となり床に泣き伏したのを覚えています。

二度と戦争は繰り返さないことを念じて止みません。「人命は地球より重い」という言葉がありますが、まさに人生の道標と思っております。

## 母娘の戦争

近 藤 文 子

(泉)

長兄が海軍に、次兄は中国に出征と、二人の息子を戦地へと送った母は二人が無事帰るまではお茶を断ち、好物の梨は生涯食べないと八幡様に上げたとのことでした。長兄は戦後間もなく帰り、次兄は翌年の大雪の日に帰りま

した。泣きながらお茶を飲んでいた母を私は絵の中の一枚のように覚えています。

戦後の食糧難は大変でした。母の着物を持って農家巡りをし、カボチャなどと交換してもらいました。運よくお米を貰えたある日、母と大喜びで帰っていたらお巡りさんに捕まりお米を没収されそうになり、怖さと悲しさで私が大泣きに泣き、やっと逃れて夕食にお米を食べることが出来た日もありました。少しあった貴重な砂糖をご飯にかけて食べ、その香りと美味しさを楽しんでおりましたら、母に「贅沢をするな」と叱られました。でもあの味は忘れられません。

そんな戦時中、私の人生を決定付ける出会いがありました。東京より疎開してきた初恋の人、主人との出会いです。私が小学生、主人が中学生のとき主人は帰京しましたが時が流れて再度めぐり合い、三人の息子に恵まれて四十八年共に生きることが出来ました。

幼い頃からの出会いを数えると六十年近い年月が二人には流れました。二

人でよく昔の苦勞話をしたものです。共有できる想いはあっても戦争はつらい日々でした。そして語れる人も逝き私も終戦です。

## 私の徴兵体験

和久津文勇

(下日出谷)

当時男子は二十歳になると、徴兵検査を義務付けられており、その例に漏れず私も検査に行き、甲種合格となりました。甲種合格こそ男の証、戦争に参加できると喜んだものです。

日中戦争勃発から六年が経過し、戦死者が増え、兵隊が不足する事態になりました。私も現役兵として、昭和十九年四月十日近衛工兵連隊への入隊が決まり、出征の日を楽しみにしておりました。出征の日には多くの友人、知

人、親戚の方々五十名程と杯を交わしましたが、皆と会えるのは今日が最後かもしれない、もう生まれた家へ帰ることはないと思うと胸が張り裂けそうでした。見送りの際には友人達が軍歌を歌って駅まで送ってくれました。

入隊後は衛生兵に配属され、我孫子にて米軍上陸を想定し準備をしておりました。班長から「この隊は宮城を護衛する名誉ある任務を仰せつかっている。他の見本になるように」との訓示もあり、奮い立ったものですが、工兵隊の仕事は、毎日の演習や色々なことで大変でした。

ある日のこと、初年兵に集まれ、と命令が出たので何かと思い整列すると、中隊長から訓示があり、「今から呼ばれた者は五歩前へ出なさい」と約三十名の名前が呼ばれました。その中に私の名前はなく、下された命令は南洋の戦地への異動でした。

その後戦況は悪化し、八月十五日、部隊長から全員兵舎前に集合し、天皇陛下のお言葉を聞くようにとの命令がありました。そして戦争が終わったことを知り、安堵しました。

- ・ 近衛兵…天皇直属の兵。皇居の警備などを行った。
- ・ 工兵…戦場における設備の運用を担う兵。
- ・ 宮城…現在の皇居。

## 平成25年度

### 私の戦争体験記

小野澤 悟

(坂田)

私は隊の本部付の検閲係でした。

戦時中で内地からの手紙が多く、中には恋人や妻からの甘い手紙があり、兵士は、皆、内地からの手紙を大事に自分の胸に下げていました。

各中隊参り中に、意地悪な上官からベッドの段下を「うぐいすの谷渡りホーホケキョ」と鳴きながら渡るように、命令され、辛い思いをしました。

上官の命令は絶対で、命令にためらったりすると、素手で殴られました。当時の日本軍では、至るところで、このような上官の暴力がありました。

私は幸いにも、終戦の十二月一日に、中国の石家莊せつかそうを出発して天津港てんしんに行き、天津港からアメリカ海軍フリゲート艦に乗りました。小便は、甲板に上



り、ロープにつかまりながらしました。海上には、日本海軍の機雷が浮かんでいて、アメリカ兵が銃器を使って機雷を爆破処理して、まるで戦場のよう  
で生きた心地がしなかったです。

荒波にもまれ、約一ヶ月間の乗船は大変でした。九州の大村港に着きましたが、  
棧橋もない浅瀬に停船すると艦の後尾が開き、それが棧橋となったので、大  
変驚きました。待ちに待った内地の土を踏み、艦の皆で日本に帰れたことを喜  
び合い、それぞれの故郷へ帰りました。

私は、昨年、九州に行き、思い出の地、長崎の大村に立ち寄りました。港  
に「外地より引き揚げ者の地」という碑が建っていました。

日本が戦争を二度としない、平和な国であるようにと祈るばかりです。

・中隊参り…教育隊内の仕組みで、学級各級ごとにまわること。

せつかそう

・石家荘…現在の河北省の市。

## 鮮烈な映像・甲府空襲

小宮山勝

(坂田)

山梨高専の一年生るとき、出征した義兄の姉の家に同居していた昭和二十年七月六日夜十一時五十三分、空襲警報のサイレンと同時に二階の窓ガラスに目も眩むばかりの青白い閃光が映った。照明弾だ。愛宕山が真つ赤な炎を上げている。驚き、姉二人に逃げるように叫んだ。私は、カーキ色の学生服にゲートル、戦闘帽の上に防空頭巾を付け、路地を走った。

空は赤黄色の閃光の列、街の四方は真つ赤な炎が闇空を焦がし、街を火の壁で包囲するように火柱を上げて燃えている。逃げられぬように街の周りにガソリンと焼夷弾しょういだんを落とし続けている。頭上に赤黄色が閃き、焼夷弾しょういだんが数発、近くで炸裂した。黄燐が飛び散り、火の玉のように燃え、家々から火の手が

上がり、見る見るうちに火は広がっていく。ガソリン臭い。また、焼夷弾だ。しょういだん  
私は、必死に舞鶴城に逃げた。

城の近くにきた時、頭上すれすれにキーンと金属的な音がして、ピカッと青白い閃光が走り、ユウユウと音を立てて焼夷弾しょういだんが落下してきた。直撃を避けつつ、息せききつて城のそり立った大石垣に雨蛙のように、へばりついた。ピカッと空が閃くとヒューヒューと不気味な音を立て青く赤く尾を引いた火の玉が民家に吸い込まれ、次々と火柱が上がる。私は、ただただ石垣にへばりついていた。

二十数分後、B二十九は、飛び去ったが、市街は火の海、火の粉が降ってくる。不気味な風は、ゴーゴーと音を立て火の粉と黒煙を渦巻かせ、猛火は時々、ドドンと大音響をたてて爆発し、火柱は天を焦がし、悪魔の目のように赤黄色に変化し、渦巻き、火蛇が狂乱する地獄のようでした。私は、ただただ悲しく、涙が止まらなかった。

広島・長崎に原爆が投下され、八月十五日の敗戦。鮮烈な映像は心の奥に

深い傷跡として、今でも残っている。戦争は、繰り返してはならない。決して繰り返してはならない。

- ・ゲートル：ズボンの裾を押さえて、足首から膝まで覆うもの。多くは軍服用。
- ・焼夷弾しょういだん：建造物や陣地を焼くことを目的とした砲弾や爆弾

## 私が見聞した戦争体験

砂 川 忠 夫

(若宮)

暑い夏の記憶、大きな仁王様が次々と大声を上げながら車から降りてくる。今まで、聞いたことのない言葉だった。今思えば、敗戦を小学校一年生で迎えた年、目にした仁王様は、進駐軍の兵隊でした。初めて食べたチョコレート

トの美味しさ、恐いながらも、大きな手にあるチョコレート欲しさに、進駐軍のいた飛行学校に通いました。

しばらくすると、練習機も進駐軍も飛行学校から消えましたが、建物は残り、そこに焼け出された人たちが外地から引き揚げてきた人たちが、大勢、疎開してきました。当時の食料不足は深刻で、生きていくために食べられるものは何でも食べました。子供ながらに戦後のひもじさは体が覚えていきます。疎開してきた学童は、勉強はできる、喧嘩は強い、足は速い、センスは良い、憧れの的でした。

当時の道路は、砂利道で、バスは木炭車、橋は潜水橋でした。鉄道は蒸気機関車で、座席はボックス式、座席の下にはヤミ米を入れ、連結器の間に跨またがって通学するような状態が昭和三十二年頃まであったと記憶しています。

上野公園には、今で言うホームレスのような住まいや仕事がない人たちであふれ、傷痕軍人が汚れた白衣を着て、あちこちで募金を行っていました。東京タワーの建設、オリンピック開催で浮かっていた昭和三十六年頃には、

白衣姿の傷痕軍人の人たちは少なくなりましたが、それでも、何人かは見かけました。

戦争で散った多くの人、外地に残された幼子、抑留された人、それらの方々の大きな命の代償、犠牲を払って築かれた今日の生活です。悲惨な戦争は、いかなる理由にせよ絶対にしてはならないと、若者や孫たちに伝えたいと強く思っています。

・進駐軍…日本に進駐した連合国軍の俗称

## 無理無体な銃後の守り

福田 太郎

(下日出谷西)

「今日も学校へ行けるのは、兵隊さんのお陰です」で始まる軍歌の独唱は、昭和十六年に成立した国民学校へ入学した年の学芸会でした。以来、松脂や

杉葉の採集、麻や向日葵の植え付けと繊維や種の収穫、軍馬の飼料となる干草作りのノルマなどが、国民学校低学年の授業と夏休みの宿題の一端でした。松脂は飛行機の燃料に、麻の繊維は落下傘の材料になると言われました。

忘れられないのは、浦和市立高砂国民学校の二年生に進級してからの新聞配達です。早朝、集配所に集まり、五、六種類、約三十部ほどの新聞を仕分け、油紙で包み左手で抱えての配達でした。今と異なり、外灯はなく、路地や小道は暗く、怖くて、一目散に息せき切って明るい道に戻りました。新聞受けても小学校低学年の児童では届かない家もあり、特に冬の雨の日などは、ただただ、どうしようもありませんでした。学童とはいえ、日本男子です。弱音を吐くのはタブーでした。新聞は、植え込みの下などに濡れないようにと、小さく畳んで、そっと置くのですが、今と違ってビニールなどといった便利なものはない時代でした。登校前に新聞を三十軒近く間違いないで配るのは、八歳の児童にとって、とてつもない大変なことでした。時々、数や種類が合わなくなってしまうです。仕方なく、最後の家は残った新聞を配ること

になります。幸いなことに終わりのほうに、数紙を購読している町工場があり、そこで帳尻を合わせることになってしまいました。子供ながらの精一杯の知恵でした。ところが、社長さんが時々、門前で待っていて、叱られるのがどうにも辛く悲しいものでした。申し訳ないと反省し、謝るのですが対策の立てようがないのです。能力を超えた無理を承知の、無理無体な銃後の守りでした。足りなくなると逃げ帰り、余ると、ちぎって川に流しました。余って持ち帰ると、家で待っている母に叱られたからです。

今、入学式には、父母どころか祖父母まで同伴するという時代です。これも、平和なればこそのことです。憲法論議もかまびすしい昨今、幼い日に経験した理不尽を、書き留めておかねばならないという思いに駆られた次第です。

・銃後の守り…戦場の後方、直接戦闘には参加しないで戦争を支援している国民（主

に女性と子供）のこと。



## 平成26年度

### 還ってこなかった祖父

三橋 一輝

(鴨川)

私が父から聞いた戦争体験です。

私の祖父、三橋寅蔵は、明治40年、4人兄弟の3男として、北海道増毛町に生まれました。大正14年に志願して海軍に入り、昭和6年5月に満期除隊となりました。昭和9年に結婚し、二人の子どもにも恵まれましたが、戦争が始まり、昭和16年の春に赤紙あかがみが来て再び兵役に就きました。

戦争は激化しており、祖父も覚悟の出征だったようです。任地ラバウルぐんじゆうびんはがきからは軍事郵便葉書で便りが来ましたが、その内容は何処で何をしているのかさっぱり分からず、ただ、「元気にしているから安心してくれ……………云々」

と書いてあるだけでした。こちらでは慰問袋いもんぶくろを作り、その内には五錢玉を縫い付けた千人針の手ぬぐいや、胃腸薬のわかもとや正露丸せいろうがんなどと共に、出征後に生まれた父の妹の写真を入れて送りました。

太平洋戦争は、アメリカ軍が次第に日本の領土を自由に攻撃するようになり、ついに昭和20年8月15日に終戦となりました。

間もなく、出征兵士たちが次々と復員してきたので、南方にいる祖父もそのうち還ってくるものと思っていました。が、待つても待つても知らせがなく、おかしいと思った祖母が復員局に問い合わせたところ、「お気の毒ですが亡くなっています」と言われ、3人の子どもを抱えた祖母は、悲嘆にくれたそうです。

暫くして、栃木県に復員された戦友の高野さんという方が、わざわざ北海道に訪ねてこられて、現地ラバウルでの生活ぶりを遺品とともに知らせてくれました。ラバウルでは、敵の空襲が激しく、僅かな稲とさつまいもを自給自足して飢えをしのいでいましたが、祖父は栄養失調とマラリアの悪化で、

終戦の1か月前に海軍病院で亡くなったとのことでした。

それにしても、当時の交通事情の中、何十時間もかけて、はるばる訪ねてこられた仲間意識の強さ、暖かい友情を改めて思い知らされました。

その後、海軍からはお悔み状とともに、埋葬したお墓の土少々、印鑑、通帳、昇進任命書が届いたそうです。祖父の遺骨は、いまだにラバウルに残ったままです。

祖父や、戦死した大勢の方たちは、日本の国と家族や友人を守るために尊い命を捧げました。我々は、その死を無駄にしないよう、二度と悲惨な戦争を起こさないように、戦争体験を後世に伝えていく義務があると思います。

・赤紙<sup>あかがみ</sup>：軍の召集令状の俗称。

・軍事郵便葉書<sup>ぐんじゆうびんはがき</sup>：戦地の軍隊兵士に宛てて自国から発送される、もしくは戦地から自国宛てに発送される郵便。日本では、第二次世界大戦終戦までの間、戦地にいる軍人が日本（内地）或いは日本から戦地の軍人

に向けて送るための郵便制度をさす。

・慰問袋<sup>いもんぶくろ</sup>…

戦地にある出征兵士などを慰め、その不便をなくし、士気を鼓舞するため、中に日用品などを入れて送った袋である。ふつう横 30 cm、縦 40 cm ぐらいの布袋で、中には武運長久の御守、薬品、タバコ、セッケン、缶詰などの日用品と慰問状が入れられ、それが契機となって兵士と差出人との間で文通が行われることもあった。袋は家庭で各自が手ぬぐいを二つ折りにして作るほかに市販品もあり、デパートでは中身のはいった既製品も売られていた。

・千人針<sup>せんになはり</sup>…

千人針は、第二次世界大戦まで日本でさかんに行われた、多くの女性が一枚の布に糸を縫い付けて結び目を作る祈念の手法、および出来上がったお守りのこと。武運長久、つまり兵士の戦場での幸運を祈る民間信仰である。

## 最後の回天特攻隊

かいてん

辻 本 政 晴

(泉)

埼玉師範学校同級生は昭和18年9月30日繰り上げ卒業する前に殆ど志願兵として戦場に行ったが、俺は卒業アルバムに平和を願って鳩ではまずいで旧師範の校章鳳凰の鳥を描いた手前もあり、志願せず最後に残った。当時和土村出身の遊馬君(健在)と現役兵として昭和20年5月13日武山海兵団<sup>たけやま</sup>に入隊した。

共に行動しようと一列に並んだ。「番号奇数一步前！」別れになった。

この頃、先発の志願兵の勅師河原長重君は少尉になって硫黄島で戦死とか聞いている。

もはや戦争も末期、一水兵としてそれに行くことになるのかと思っていた

ら、形式上の少尉として試験合格、広島近くの大竹海兵団気付海軍潜水学校入校。

海に潜る前に訓練と称する期間があるだろう。学校では、沈みゆく潜水艦の中で事故原因や潜水艦の将来、乗員遺族への心配りを著した遺書を残した佐久間艇長の美談も学習していた。

昭和20年7月8日山口県平生町の海から三隻の特攻隊「多門隊」（楠木正成の幼少名）を送った。第一種軍装に着替え、皆で別れの帽振れ、三人乗りの三隻は、潜水艦に付添われていたという。

多門隊の三隻は海上を左廻り、別れの帽振れに答え潜って行った。

俺は北方を向き山の峰、我が家に向って死なないことを誓い、あの空に少年の頃、高く上げたトンビダコを上げようと誓った。

一行帰りかけ、大塚君にこっそり心の内を伝えた、俺は脱走するからな……と。

その日をうかがっている時広島にピカドン原爆が！

我隊は宮島の対岸の山林へ。8月15日に解散。ほぼ俺のすじがき通りになつて父母に会うことができた。

かいてん

- ・回天…太平洋戦争で大日本帝国海軍が開発した人間魚雷であり、最初の特攻兵器。
- ・特攻隊…特別攻撃隊の略で、相手に対し、体当たりもしくはそれに類似した攻撃法を行う部隊のこと。

- ・師範学校…戦前に存在した、初等・中等学校教員の養成（師範教育）を目的とした中等・高等教育機関。

たけやま

- ・武山海兵団…現…横須賀の陸上自衛隊駐屯地。

わど

- ・和土村…現…さいたま市岩槻区。
- ・帽振れ…帽子を振って別れをすること。

## 東京大空襲の直後を辿った記憶

高橋 眞次

(加納)

昭和20年3月10日の午前10時頃、当時旧制中学2年生の私は、省線電車きゆうせいちゅうがく有楽町駅のホームで焦土と化した東京の姿に呆然と立ち尽くしていました。しょうせん

その日の早朝、横須賀の追浜で軍の飛行場構築のための土工の飲場を経営していた、母方の叔父の家から、品川経由で有楽町までは何とか辿り着きましたが、それから向島の自宅までは徒歩で帰るより手段はありませんでした。

架線は焼け落ちていましたが、残っていた都電のレールを頼りに歩き始めた目には、一面の焼け野原、道の両脇には泥人形のような焼死体、髪を焦し煤すすに汚れた若い母親の背の幼児は首を後ろに垂れ息をしている気配はありません。その様な風景に目を背けて、上野から浅草と夢遊病者の様に歩を進めた



私が、吾妻橋まで辿り着いた時信じられない状況を目にしました。

橋の下は、沢山の水死体で川面が見えないのです。烈火に追われ、生きる一縷の望みを水面に託したのでしょう。老若男女の水死体は、憐れより恐ろしく、涙を流しながら橋を渡り、隅田公園に入ってホッとしたのは、公園入口から牛島神社までの隅田堤に家財を一杯に積んだ、リヤカーや大八車の柄や荷に凭もたれて眠っている人たちでした。成人した私が就職した企業で、酸素欠乏症の知識を習得した時に、東京大空襲の朝、隅田堤で眠っていた人達は、向島からの焰ほのおと浅草方面からの熱風で、あの場所が無酸素状態となり、疲れ  
た眠りでは無く、死亡していたのだと気付いた時には、肌あわに粟が生じました。  
辿りついた我が家は幸いに消失は免れましたが、多くの小学同級生が住んでいた町々、通い立ち読みをした古書店等、想い出が詰まった場所が全て灰燼かいじんとなった淋しさ悔しさは、忘れることは出来ません。中学の級友の約半数は3月10日以降、姿を見せませんでした。

友爆ぜし赤き記憶や春半ば

眞次

・旧制中学…旧制中学校のこと。旧制中学校とは学校教育法が施行される前の日本

で、男子に対して中等教育（普通教育）を行っていた学校の1つである。当時の2年生は13歳。

・省線電車…日本国有鉄道のこと。日本国有鉄道と呼ばれる前は、「院電」（鉄道院時代）や「省線電車」（鉄道省・運輸通信省・運輸省の時代）と呼ばれていた。

・大八車…江戸時代から昭和時代初期にかけての日本で荷物の輸送に使われていた総木製の人力荷車である。

平成  
27年度

## 今も耳に残る玉音放送

小川 富久

(若宮)

4月9日、天皇・皇后両陛下は戦後70年「慰霊の旅」としてパラオ諸島のペリリュー島で戦没者を慰霊し、平和の祈りを新たにされました。感慨無量です。私は70年前10才小学校4年生でした。場所は群馬県高崎市立片岡小学校在学中です。

「エイ」「ヤー」こんなかけ声で青竹を4〜5メートルに切り先端を鋭利に切り、火で焙り油を塗った竹槍で命ぜられるままに生徒達は「一人一殺」という合言葉のもと突き出した行為の一つでした。私の生家は群馬県高崎市石原町西半田という所です。家の近くに小祝神社おぼりがあり学校が終わるとこの場

所が私にとって遊び場であり、数々の思い出を作った所です。夏はこの神社以外に烏川で泳ぎ釣り等が加わりました。母が手作りしてくれた布のグローブで三角ベースの野球をやったり、メンコ、コマ廻し、紙芝居の見物等です。

小祝神社は反面、軍隊高崎38部隊の演習、仮設基地になったのです。威厳のある将校さん始め多くの兵隊さんの規律正しい訓練は今でも忘れられません。兵隊さんたちはみんな子供達には優しく私は何度も頭を撫でられました。演習が休憩に入る前上等兵さんのかけ声ひとつで二、一等兵達が銃の先端の銃剣を頂点として30丁位の銃が傘を広げる様にたてかける様は今だに忘れません。

又、昭和20年8月15日何か重要な発表があると、兄と一緒に小祝神社に行ってみると社務所前に大勢の人達が集まっていました。ラジオ放送は私の耳にはほとんど雑音めいた音でしたが、ハッキリ聞こえたのは耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍びというお言葉が今も耳に残っています。玉音放送でし

ぎよくおんほうせう

小学校3年生の時ゼロ戦の絵を画き特賞に選ばれ、しばらく廊下に貼り出されていました。それ以後六三三制度のもと片岡中学に入学し新制度で中学には上級生はいません。高校進学、卒業、社会に出て29才の時あの小祝神社で結婚式を挙げました。

・玉音放送<sup>ぎよくおんほうそう</sup>…天皇の肉声（玉音）を放送することをいう。1945年8月15日正午

の放送は、太平洋戦争における日本の降伏を国民に伝えるものであった。

・ゼロ戦（零式艦上戦闘機<sup>れいしきかんじょうせんとうき</sup>）…第二次世界大戦期における日本海軍の主力艦上戦闘機。

忘れられない4月15日

中村 みさ

(川田谷)

当時、私は蒲田の矢口ノ渡という所に住んでいて、会社勤めをしていました。昭和19年頃になると戦況が厳しくなり、会社の同僚も柏連隊に配属になりました。その同僚から「2、3日したら戦地に行くので会いに来てほしい。」と言われ、会社の仲間5人くらいで会いに行きました。そこには、たくさんのご家族が面会に来ていました。そばにいたお母さんらしき人が息子さんに好きな食べ物を持ってきたのでしょうか。息子さんに渡そうと風呂敷を広げていると、憲兵が見廻りに来て、その息子さんを連れて行ってしまいました。ご家族の方は泣いていました。私も泣きました。戦地に行けば帰ってこられるかわからないのに。何で軍隊という所はこんなに厳しいのかなと思いました。

た。

昭和20年に入ると、毎夜の様に大空襲がありました。4月15日午後10時頃、空襲警報が鳴り、母と弟と私の3人で庭の防空壕に入りました。父は地域の見廻りに行ってしまう家にはいませんでした。しかし、防空壕の入り口近くに爆弾を落とされ慌てて外に出ると、私の家は火の海になっていました。家から1キロくらい離れたところに多摩川の土手があったので、そこへたくさんの人たちと逃げました。上から爆弾、焼夷弾しょういだんを落とされ死ぬ思いでした。周りに工場がたくさんあり、その工場を燃やされたため、熱くて多摩川の水に入ったり出たりして明け方4時に空襲警報解除になりました。帰る途中、亡くなった人たちの山ができていました。涙がとまりませんでした。家は焼けてしまいなくなっていました。父とは家があった場所で会うことができ、丹庄村（現在の埼玉県児玉郡神川町）の父の実家に行くことになりました。

終戦となり8月20日に、会社の人達と一緒に皇居に行きました。皇居から

帰ってくる人達は皆泣いていました。私たちの前に一人軍人さんが座っていました。そのうち、前に倒れたので急いで行ってみると自決していました。皆が何も兵隊さんが悪いわけではないのに何で死んでしまったのと泣きました。中尉さんでした。

幸い、私は空襲で家族を亡くさずにすみましたが、戦争中は怖いことや、悲しいことばかりでした。また、食べ物や衣服をはじめ生活のすべてを制限され、本当に厳しい時代でした。二度と戦争をしないでほしいと強く願います。

・柏連隊：正式には「東京師管区歩兵第二補充隊」。昭和18年に高射砲第二連隊（現在の千葉県柏市）に駐屯、兵士を召集、教育して部隊編成し、戦地に送ることを目的とした。

・憲兵：軍事警察をつかさどる兵。また、その兵科。日本では明治14年に創設され、陸軍大臣の管轄に属した。しだいに権限を拡大し、一般民衆の思想取り締まりを主要任務とするようになった。第二次世界大戦後に解体。



## 平成28年度

### 甲府の街 空襲

内 藤 武

(川田谷)

私は山梨の甲府に生まれ7歳の時空襲を体験しましたので、僅かな記憶を頼りに体験を綴りました。

昭和19年7月、マリアナ諸島を占領した米軍は、サイパン島・テニアン島に戦略爆撃機B29が離着陸できる飛行場を建設、日本本土への爆撃基地としました。昭和20年になると、空襲も本格化し、3月10日未明の東京大空襲以後は「軍事施設・人口密集地」を攻撃目標とし、油脂焼夷弾しょういだんによる無差別攻撃で日本本土の焦土化を行いました。

甲府もその例に漏れず、昭和20年7月6日夜11時頃、突如「警戒警報」の

サイレンが甲府全域に鳴り響きました。近所の人と小高い土手の上に登って見ると、灯火管制で闇に包まれた甲府の上空にB29が高度1万メートルで侵入、甲府北部の「愛宕山」頂上付近に投下された照明弾を頼りに市内全域は焼夷弾しょういだんが次々に投下され大火災となりました。

岡島百貨店・甲府市役所・工場・住宅などが悉く消失、特に一蓮寺の大伽藍が轟音と共に焼け落ちた様子、荒川に架かる橋が破壊され逃げ場を失った多くの人々、また赤ん坊の頭を下にして背負う母親、親を見失い泣き叫ぶ子供、精根尽き果てうずくまる老婆、更に熱風を避けて池に飛び込み水面に浮かぶ死体等々現世の地獄を見る思いでした。

空襲後30分ほどで油臭い小雨が降りました。それが「油」なのか「人間の焼けた臭い」なのか、子供ながら薄気味の悪い不吉な感情を抱いた記憶は今でも鮮明です。

因みにこの空襲では、死者1, 127名・重軽傷者1, 248名・行方不明者35名・全戸数25, 898戸中18, 094戸が消失破壊などの被害を

受けました。米軍ではB29が131機に将兵314名が搭乗、投下した

しょういだん  
焼夷弾791屯の記録が残されています。

戦争には善戦も聖域ありません。有るのは破壊と殺戮さつりくのみ、悪の最たるもので、絶対に起こしてはならないものなのです。

## 戦争体験記

小林 まちこ

(下日出谷)

大きな枝垂桜がある千葉県山武市の妙宣寺は、私が疎開していた地である。当時一緒に疎開し、今も千葉県に住んでいる友人から電話があり、とてもなつかしく会いたくなり、孫が車で友人宅と妙宣寺へ連れて行ってくれることになった。千葉県への旅は、私の戦争体験を辿る旅となった。

昭和19年、茅場国民学校の3年生は千葉県山武郡睦岡村にある妙宣寺へ疎開することになった。寺ではみんな夜になると泣いており、風呂にはたまにしか入れず、髪にはしらみがたくさんいた。寺の門から本堂の間は、100mほどの長い参道があり、横には枝垂桜があつた。この枝垂桜をみて、疎開していた学校の先生が歌を作った。「江東橋で生まれ育ったふるさと後に集団疎開、強く大きくなれ、春を待つ、春を待つ・・・」妙宣寺に行くまでは、記憶に全くなかったが、寺に行つた途端に記憶がよみがえり、歌の歌詞が次々と思い出されてきた。

寺には杉がたくさんあり、毎朝、門から本堂までの間の落ち葉をほうきではいた。3月10日の朝は、黒い灰がいっぱいだった。前日の夜の東京大空襲により、遠くまで飛んできた灰だった。ここまで灰が飛んできたのは、東京大空襲の時と、関東大震災の時の2回だけだそうだ。

東京大空襲により、東京は焼野原となり、疎開した生徒の家族がぼつりぼつりと寺に迎えに来るようになった。私はいつも本堂の階段に座り、迎えに来る家族をみていた。あるとき、門の入り口に2つの人影がたった。本堂か

らではぼんやりとしか分らないが、私は父と兄であることがはっきりと分かり、その瞬間、肉親の血のつながりを感じた。

弟がこの大空襲で亡くなったと父から聞かされた。こんど誰か死ぬ時はみんな一緒だと言って私を迎えに来たのだった。父と兄と一度東京に戻り、その後、父の親戚のいる修善寺に移ることになった。修善寺では家族は離れ離れに暮らした。私は小学校に通い、藁で綱を編み、桑の皮で兵隊さんの服を作った。終戦の玉音放送はラジオで聞いた。戦後、東京の小岩に一時身を寄せ、その後錦糸町に戻り、娘時代を過ごした。

友人からの電話がきっかけで、妙宣寺を訪れたことで、当時の記憶が走馬灯のように次々に蘇ってきた。この記憶を戦争体験記として残したいという思いから、今回の執筆を思い立った。今、肺の病気を患っており、今後どうなるか分からないが、枝垂桜の咲いている時期に妙宣寺をまた訪れたい。

## 終戦の日

小川 康一

(故人)

その日の天候は定かではないが、むし暑い天気であつたように思う。

玉音放送を聞いたのは工場ではなく自宅であつた。

これは、恐らく、前日に重大発表があるから、自宅で待機して聞くべしとの指示があつたのかも知れない。或は、陰悪な交通事情のもとで、工場まで行くことができず、やむを得ず、自宅にいたのか、そのへんは、はっきりしない。

ともあれ、玉音放送は、家族と共に自宅で聞いたのである。

敗戦の事実を聞いたときは、どうであつたか。48年前の出来事であり、はつきりとした記憶はないが、茫然自失の状態ではなかつたかと思う。

そして、又、長い長い戦争が、とうとう、終ったかという感慨と、これでは死ななくて済んだという安堵感が湧いてきたような気がする。

思えば、昭和5年に生を受けて以来、幼少期から少年期は戦争に明け暮れていたわけであり、私の終戦時までの生涯は、戦争に対して不感症になっていた。そして、行く行くは、戦争に行つて死ぬであろうということを観念し、死というものに対して、それほど、恐怖感、抵抗感を抱いたことはなかった。

真珠湾攻撃、神風特攻隊など自分の身を犠牲にして敵艦に突っ込む戦法に対して、当時、無謀な戦法という感じは、さらさらなく、身を捨てて国に殉ずるということに、むしろ、共感を憶えたものである。

そして、何よりの諦めは、自分だけでなく、ほかの人も死ぬのだからという単純な考えが底流にあったように思う。

このような死に対する張り詰めた考え方が終戦の報のあと、堰を切ったように崩れ、前述のような安堵感をもったのであろう。

終戦の日から既に長い年月が経過し、現在、私達は平和を謳歌し、飽食の

日々に明け暮れている。

この平和な日々の実感は、戦争を経験しない世代には、当然のこととして受けとめているのではなからうか。

あの暗黒な時代を生きた者のみが、両極端な世相を対比することにより、強烈に平和の有難さを、かみしめることができるのではなからうか。

このように考えなければあの炎色の青春時代が浮ばれない。

そうは云っても、あの当時の諦めに似た死生観を顧みると、背筋の寒くなるのを憶えるのである。

※原稿は、故人が平成5年頃に執筆された体験記をご提供いただいたものです。



## 東京大空襲と私

遠藤敏勝

(朝日)

昭和20年3月10日未明、私はけたたましい空襲警報のサイレンで飛び起き、素早く暗闇の床下防空壕にもぐり込んだ。私が小学校3年生の時である。B29爆撃機のすさまじい爆音とゴーツしょういだんという焼夷弾しょういだんの音に怯えながら、夢中で祖母と念佛を唱えていた。ヒュウ・ゴーツしょういだんの音と焼夷弾炸裂による閃光が床板のスキ間からもれるたびに、焼夷弾投下の恐怖に体中が震えた。白々と空が明るくなった頃、激しく続いた空爆もやとおさまった。防空壕からはい上り、「ああ……！今日も無事だった」と思いきり飛び跳ねた。

深川しょういだんが焼夷弾にやられたと聞いて、見に行った。見渡す限りの焼け野原。すべてが瓦礫の山と化していた。ブスブスとくすぶり続ける焼け跡を見回す

と、銀行の赤レンガの残骸と茶色に焼けただれた金庫がぼつんと立っていた。歩く道も熱く、顔をよぎる風も熱く感じた。帰り道で、黒船橋から下を見ると、異様な光景に呆然と立ちすくんだ。筏の上に多数の人がゴロゴロとこころがり、重なり合っていた。焼死体、下半身が水につかったり、上向・下向でぶかぶかと浮いている人、などであった。この様子は川下のはるか彼方まで続いていた。変わり果てた姿を前にして、ボォーと見ていたが、急に恐ろしくなり夢中で家に帰った。これは焼夷弾しょういだんによる焦熱地獄をさまよい、苦しまざれに水を求め、筏の上で窒息死か凍死した人達なのだ。

午後に都電通りに出ると、深川・本所しょういだんで焼夷弾によって焼け出された人々の行列を見た。顔は煤で黒くよごれ、手に鍋釜をさげ、大きな風呂敷包を背負っていた。中には、リヤカーに山ほどの家財道具を括りつけ懸命に引いていた。人々の表情は疲労に満ち、うつむいてモクモクと牛歩していた。この行列は数日間も続き「この人達は何処へ行くのだろう」と心配した。

防空頭巾をかぶり、必死に耐えた防空壕生活から解放されたのは8月15日

終戦。その日、お世話になった防空壕をのぞきこみ「長い間ありがとう。もう二度と空爆はゴメンだ!!」と心から叫んだ。

・黒船橋：越中島と門前仲町に架る橋（隅田川の支流）、木場の材木の集積場所。

※この冊子の掲載内容は、原稿をお寄せいただいた当時のものです。  
一部現状にそぐわない箇所がございますことを、ご了承ください。



# 続々 いのちの伝言

— 私の戦争体験より —

初版第一刷発行 平成二十九年（2017）三月

編集・発行 桶川市 市民生活部 自治文化課

桶川市泉一―三―二十八

048（786）3211